

2つの世界遺産から21世紀を読む

静岡県立大学 学長

鬼頭 宏

Hiroshi Kito
President
University of Shizuoka



昨年(2018年)7月、「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」が世界文化遺産として登録された。日本では18番目、現在、一番新しい登録遺産である。日本にキリスト教がもたらされたのは16世紀半ばである。秀吉のバテレン追放令に続き、江戸幕府は1612年から3度にわたって禁教令を布告した。しかしその後も250年以上にわたって密かに信仰を持ち続けた人々がいた。その伝統を伝える城跡、教会、集落などの物件が世界遺産として認められたものである。

もう一つの世界遺産は、2015年に登録された「明治日本の産業革命遺産 製鉄・製鋼、造船、石炭産業」である。8エリア23の構成資産からなり、西洋から日本への産業化の移転が成功したことを示す産業遺産である。

江戸時代の禁教政策によって生まれた潜伏キリシタン、そして明治期の産業革命遺産との間に、どのような意味を読み取ることができるだろうか。

キリスト教禁教令は、偉大な副産物を生んだ。宗門人別改帳である。禁教令を發布した幕府は宗門改と呼ぶ信仰調査を開始し、1671年には宗門人別改帳の作成を命じた。これは村ごとに作成され、世帯人員の名前、続き柄、年齢を記載し、キリシタンでないことを証明するために寺院は寺請状を出した。宗門人別改帳は明治に入るまで200年にわたって毎年作られたことから、人口研究にとって貴重な資料となっている。

幕府は全国人口調査も行っていて、これによると1721年の最初の調査では2600万人余り、1792年には2500万人を下回っている(ただし武士人口は含まれない)。最後の記録が残る1846年には2690万人余りと、125年間にわずか3%の増加でしかなかった。宗門人別改帳に基づいた歴史人口学の研究によると、江戸時代後半の長期にわたる人口停滞は、飢饉や疫病による死亡率の上昇があったことを無視することはできないが、基本的には女性の晩婚化と既婚女性の出生数の減少が原因であったことが明らかである。18世紀の徳川

日本は、少子化と人口減少の時代だったのだ。

「明治日本の産業革命遺産」は、「明治」と付けられているものの、伊豆韮山の反射炉、萩の松下村塾、反射炉、佐賀藩の高島炭坑、鹿児島島の集成館など、長崎に渡ってきた書籍や欧米人の手ほどきをうけて、幕末に着手されたものが少なくない。2014年に登録された世界遺産「富岡製糸場と絹産業遺跡群」も同じである。富岡製糸場はフランス人技術者の指導を仰いで、1872年に操業を開始した機械による官営工場である。しかしこのことは、明治になって初めて製糸業が始まったということの意味しない。その背景に、養蚕製糸が農家の副業として全国で活発に営まれるようになっていたことを忘れてはならない。

18世紀の徳川日本では貿易が制限されていて、食料や資源の輸入ができなかった。耕地、草地、森林など環境資源の制約から、人口が抑制された時代であった。そこに気候寒冷化が加わって人口は減少した。しかしそれにもかかわらず、木綿、絹などの繊維産業、酒、醤油などの醸造業を中心に、農村を主な舞台とする「プロト工業化」が進んだ時代であった。そこで培われた経営管理能力、勤労意識、読み書き・計算能力などは、欧米から近代技術を導入するための基盤になったのである。

ひるがえって21世紀の日本を見てみよう。出生率が回復するとしても、現実にはありえないほど大量の移民を受け入れないかぎり、今世紀中は人口が減少し続けるだろう。しかしそうだからといって悲観するには当たらない。2つの世界遺産の歴史的意味を検討していえることは、人口減少期が次世代の新しい文明社会を胚胎する時代であったということである。いまわれわれが注力すべきは、人口減少への適応戦略をとりながら、近代産業文明とは異なるエネルギー資源をベースとして、AIを駆使した生産技術により、新しい価値と新しい生活様式を創造することである。